

大阪 A・P・S コンソーシアム 介護スキルラボ

介護職技能実習生に対するベトナム講師派遣報告書

実施期間：平成 31 年 4 月 2 日（火）～令和元年 5 月 4 日（土）

実施場所：ベトナム ハノイ ホアンロン教育第 2 センター

報告日：令和元年 6 月 12 日（水）

報告者：社会医療法人ペガサス 山本 真吾

目的

- ① アジア健康構想の一環である外国人技能実習制度における、「介護職に関する知識、技能移転、人材還流」のため、現地派遣講師として約 1 ヶ月間、介護技術の指導を行う。
- ② ベトナムの生活で現地の文化や習慣を知る。また、異国での生活を体験することで、今後来日し日本での生活を送る実習生の気持ちを知る。

講義・カリキュラムについて

技能実習生の日本語の資格取得状況

C クラス 11 名【N4：全員取得済み N3：6 名取得（5/4 現在）】

D クラス 4 名【N4：全員取得済み（5/4 現在）】

技能実習生の日本語の習熟度について

C クラス：通訳がない状況でも講義に支障がない程度までにヒアリング能力は成長していると感じた。音読に関しても問題なく行えていた。しかし、やはり習熟度には個人差がみられる為に講義の際のグループ分けや話しかけ方など、気を配ることは必要であると感じた。

D クラス：C クラスと比較するとカリキュラム期間も短い為、ヒアリング、音読に関しても習熟度は落ちる。通訳がないと伝わらない場面もみられた。しかし、4 人と少人数のであるため個人差が発生しにくく、時間を割いて説明する事ができた。

カリキュラムについて

C クラス（講義内容、実施状況）

総合生活支援技術 演習 【洗面の介助、座位での上着の着脱の介助、体位変換（仰臥位から側臥位の介助）、起居の介助、車椅子の移動の介助、食事の介助】講義と実技

どの演習もまずテキストを用いて生活支援技術を復習、確認をする。その後、「技能実習評価試験 初級 介護技能実習評価表」のチェック項目に添いながら、声掛けや説明と同意、自立支援の重要性を説明しながら実施してもらう。また、日本語の習熟度を考えグループ分けやペアを考えるようにする。

D クラス（講義内容、実施状況）

【身体介護業務の関する知識、専門性を活かした介護過程の展開、社会生活とルール、物品管理、技能実習評価試験対策など】講義と実技

介護過程の展開など専門用語が多くあるため、理解できているかを確認しながら講義を進める。フェイスシートやアセスメントシートを記載する際には身近な人をモデルとして記入練習をおこなう。実技に関しても少人数のため、個人差があまり生まれにくく行えた。

1 期生 AB クラスの出国

- ① 4月4日にABクラスの在留資格がおりました。それに伴い2日間（4月10日、11日）ホアンロンでABクラスの講義を行うことになりました。私自身ABクラスの講義を行ったことがなく、実習生達もカリキュラム終了から日数が経過していることもあり、少し不安でしたが日本からのサポートもあり無事に行えました。
- ②講義内容に関しては、まず実習生達の現状の日本語の能力を知るために、短作文を書いてもらい発表してもらう事を何度か行いました。また講義中、休憩時間に関わらず日本語のみの使用を促し、出国に向けての準備を行いました。

② 出国当日

4月22日、当日より視察の為に渡越していたペガサスの3名、私、坪忠典氏、ホアンロン職員のハインさんで空港へ出発を見送りに行きました。

当日は、他の技能実習生の出発も多く、空港には見送りの家族が入れないよう入場規制が行われていました。海外に出国することが当たり前の日本では想像しにくいことですが、技能実習生のほとんどが初めての出国ましてや期間も短くはありません。家族や親戚一同で見送りたい気持ちの大きさが入場規制となっているようでした。また、その様子を見て日本での第2フェーズの重要性を再認識した夜でした。不安な表情を見せていた実習生もいましたが、最後には笑顔で出国していきました。



4. 成果と所感

Cクラス、Dクラスの両クラスを通じて感じたのは、私自身が講義する際に少し実習生達に合わせた日本語を話している所だと感じました。出発前は活きた日本語を、と話すスピードや言葉をなるべく変えずに講義を行おうと思っていましたが、伝わらないことやカリキュラムの進捗状況を考えて少し合わせた日本語になっていたかのように思います。交代の講師も同じ事を思っており、今後改めて注意すべき点だと感じた。大きな決断をし日本に技能実習生として来日する事を考えると、この第1フェーズである程度の不安を解消するよ

うな講義を展開していく必要があると思いました。第 2 フェーズに関して言えば、生活面においては私自身が異国で生活することで感じた孤独や不安ありました。この経験を自法人の職員に伝え公私ともにフォロー出来るような体制をしっかりと整えていきたいと思ひます。

5.最後に

ベトナムでの生活に大きな不安を抱いての出発となりましたが、ホアンロン職員のみなさん、またベトナムでの生活を公私ともに支えて頂いた坪忠典氏と家族の皆様。また、日本及びベトナムにおける A・P・S コンソーシアムに関わる全ての方々に心より厚く御礼申し上げます。このような機会を与えて頂いたことに感謝いたします。



